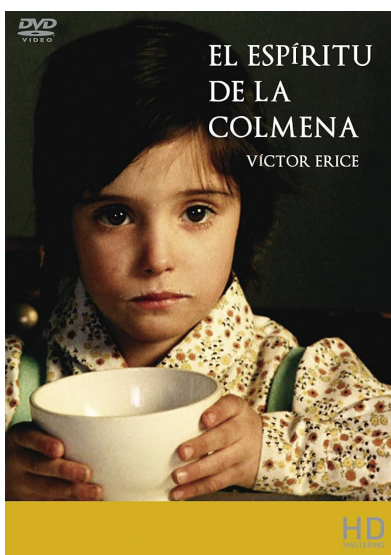


## 連載 47 『フランケンシュタイン』と女性の／女性へのまなざし

トラックに乗って映画がやってくる。集会場の暗闇のなかで少女が目を見開いて怪物の登場と死をみつめる。「怪物はどうして死んだの？」と姉に問いかける。死んではいない、村外れに隠れている、なかば答えに窮した姉はいう。少女は村はずれの井戸のある小屋を訪れ、そこで脱走兵と心を通わせる。殺される脱走兵。家出した少女は熱に浮かされて怪物の夢をみる。ビクトル・エリセ監督、アナ・トレント主演の『ミツバチのささやき』（1973年）である。

フランコ将軍の独裁下の1940年ごろのスペインが舞台。少女、アナ・トレントの心をゆさぶった映画は『フランケンシュタイン』（ジェームズ・ホエール監督、1931年）だ。フランケンシュタインは怪物の名前ではない、怪物を生み出した学生の名前である。怪物には名前がない。映画の副題にも『フランケンシュタイン 怪物をつくった男』とある。

怪物の名前ではなく、学生の名前が作品の名前になったのは、人工生命を生み出すという自然科学者の狂気の方が焦点化されているからだ。原作はメアリー・シェリーのゴシック小説、人工生命体を科学の力で作り出すとは創造主の神に対する背信行為であり、フランケンシュタインはみずから創造したものによって滅ぼされる。生命をめぐる超越的な存在、科学者、女性のドラマは、現代の読者にフェミニズムの難問をつきつけてもいる。



『ミツバチのささやき』DVDパッケージ  
(IVC,Ltd. 販売、2015年)



『フランケンシュタイン』（1931年）長尺広告（表と裏）  
『キネマ旬報』（1932年3月1日号）

しかしながら怪物を演じたボリス・カーノフの異形とともに「フランケンシュタイン」の名前は流布した。いまでは「フランケンシュタイン」といえば死体をつぎはぎしてよみがえった不気味な怪物を指すかのように転じている。

ジェームズ・ホエール監督は続編『フランケンシュタインの花嫁』を、小説を書くメアリー・シェリー、パーシー・シェリー、バイロンらの枠物語をとりいれて製作し、ボリス・カーノフも登場して、これも好評を博した。

『フランケンシュタイン』は日本では、1932年に封切られた。

飯田心美は「観客の心を無闇と変態的戦慄に駆り立てる点に於て、邪劇と言へばまさに立派な邪劇と言へやう。だが邪劇もかう堂々たる大物になるとなかなかどうして侮りがたい魅力があるものだ」（『キネマ旬報』1932年4月1日、各社試写室より）と評した。

清水千代太は「最も典型的な恐怖劇である。「怪

談」趣味の映画である。その最も傑出したものの一つである」（『キネマ旬報』1932年5月11日、主要外国映画批評）と論じた。清水の情報によれば、武蔵野館、日本館などの一流洋画館で上映されていたようだ。

批評家たちは『フランケンシュタイン』を恐怖映画のジャンルの内側で扱っていた。これに対し、『ミツバチのささやき』で少女アナがみまもるのは怪物の行方である。怪物が悪意なく無邪気なミメシス（擬態）によって花を川に投げ捨てるようにそこにいた少女を川に投げ捨ててしまったこと、憤激した群衆によって怪物が襲われ虐殺されたことに、アナは衝撃を受けている。アナのまなざしは、『フランケンシュタ

イン』の受容史と怪物像の変容をあらわしだしているようだ。

すぐれた作品には作者にも同時代の読者にも読みきれない豊富な意味が包摂されている。同時代には見えなかった価値が、時の流れのなかで、うごめきだし、読めるようになることは、傑作というものが読みつくされるものではなく、なかば閉ざされた宝箱であるからかもしれない。リメイクやアダプテーションが力を発揮するのはそこにおいてである。『ミツバチのささやき』による引用は『フランケンシュタイン』の新たな読みを提示してくれたのである。あえかな少女のまなざしと繊細な手つきによって。